

国際都市 ジュネーヴの歴史

宗教・思想・政治・経済

大川四郎・岡村民夫 編

昭和堂

Les libertes et franchises de Geneve.



第1節 幕末、明治——十九世紀後半ジュネーヴ市における日本研究

十九世紀スイスとオリエント研究

スイスは内陸国であるために、オリエント研究に対する関心は十九世紀後半まではあまり強くなかった。ヨーロッパ諸国の貴族層が以前から収集していた中国趣味 (chinoiserie) のコレクションも、スイスにはあまり多くない。最も早く日本美芸術の大きなコレクションをスイスへ運んだのはヌシャテル (Neuchâtel) 出身の外交官エメエ・アンペール (Humbert, Aimé, 1819-1900) であった。アンペールは日本とスイスの外交関係を築く上でイニシアティブを執り、一八六四年に調印された日瑞修好通商条約をめぐる外交交渉を繰り返しながら一八六三―六四年に一〇ヶ月を日本で過ごした。帰国後に刊行された旅行記『図解日本 (Le Japon Illustré)』はアンペールの名を日本学の歴史に刻むことになる。日本をきわめて好意的に紹介するこの著作においてアンペールは、十九世紀に特徴的であった目的論に染まった考えを表し、日本はスイスと似た道を経て近代化するだろうと予想した。その上で、彼のリベラリストとしての価値観がその日本観を形成した。例えば、「貴族」や「僧侶」の権力を倒し、知識を普及させることは必ず社会的進歩の前提だと信じていた。百姓を搾取し、その野心の発展を抑えているのは仏教の僧侶だといった社会観は、スイスの十九世紀中旬に於けるリベラリストとカトリック保守派の対立を日本に映したものだと言えよう。アンペール自身はリベラリストの政治家である上に、ヌシャテル州がプロイセンの貴族支配を打倒し、ブルジョアの民主主義制度に変えた一八五六―五七年の革命 ("Affaire de Neuchâtel") に中心的な役割を負った過去があった。したがって、日本の歴史的発展も自由主義の革命を必要とすることを予言した。徳川政権が打倒されることにより日本人の経済的野心が発展し、彼らは「西洋の最も優秀な生徒になるに間違いない」と楽観的であった。²⁾

アンペールは日本語に堪能ではなかったが、外交官であったために一般の外国人には非公開の場所も訪れることが許され、西洋における日本に関する知識を大きく広げた。帰国後はヌシャテル大学の学長を務めたが、その後日本へ旅行することは二度となかった。一八七一年には、日本在留の時期に収集した三三六八点の美術工芸品のコレクションをジュネーヴの出版業者フランソワ・トゥレティーニ (Turretini, François, 1845-1908) に売り渡した。³⁾ トゥレティーニは日本好きな書籍収集者であり、東アジア諸言語の代表作品を出版していた。その活動を介して、彼はジュネーヴを中心とした、ヨーロッパ各国を含める研究ネットワークを築いたのである。

アンペールの『図解日本』にはヨーロッパ中心主義的世界観が読みとれる。野心にあふれる日本人はヨーロッパの国家体制つまり「文明」を受け入れることによって進歩するだろうと、アンペールは信じていた。ヨーロッパを模倣した政府の革新によって、民衆の経済的かつ文化的水準は発展すると述べている。⁴⁾ 東アジアで軍事的権力を排他的な植民地主義に使うことを望めない小さな内陸国の代表としては、アンペールは弱小の国々にも世界貿易の「民主化」による豊かな未来を予言することに至った。このリベラルでありながらも楽観的な見方は、輸出市場へのアクセスに頼る小国スイスの経済的事実を配慮すれば論理的な結論に過ぎなかった。ところが、アフリカの植民地化などを背景にして、十九世紀半ばに特徴的であった自由貿易イデオロギーは、その後半にはいよいよ人種差別主義によって隅に追われつつあったのである。

エドワード・サイードが指摘した通り、オリエント学がヨーロッパの権力政治に貢献した例は多い。⁵⁾ アンペールのように政治的な関心があった場合には、異国情緒と共感を往き来するオリエント学は政治的力関係を反映したのである。その一方、スイスのオリエント学で先進的であった二つの研究会、「ジュネーヴ地理学研究会」と「ヌシャテル地理学研究会」は、フランス人のエリセ・レクル (Reclus, Elisée, 1830-1905) やロシア人のレオン・メチニコフ (Metchnikof, Léon, 1838-1888) といった無政府主義者の亡命者たちの影響が強かった。⁶⁾

メチニコフは、お雇い外国人として一八七四年から一八七六年まで日本に滞在し、日本語に堪能であった。⁽⁸⁾ 本語の歴史資料を研究対象に取り上げるほどの野心まで抱いていた。⁽⁹⁾ 一八八一年にトゥレティーニによって刊行された著作『日本帝国 (L'Empire Japonais)』はフランス語圏における日本研究に大きく貢献し、受け入れられた。この実績により、メチニコフは一八八三年、ヌシャテル大学の地理学教授に任命された。⁽¹⁰⁾

レクルはトゥレティーニやメチニコフも関与した主著『新総合地理学 (Nouvelle Géographie Universelle)』(1882)において、社会の進歩は人類の団結を経て起こるものと述べ、当時流行していた人種差別のイデオロギーを疑っている。当時のオリエント学では、民主主義を発明したといわれていたギリシャとの比較対象に、「アジア」の文化的基盤として古代エジプトやシリアの独裁社会が挙げられることが多かったにもかかわらず、レクルは古代中国を古典ギリシャに比することによって中国の文化基盤を西洋と同じ地平に引き上げたのである。⁽¹¹⁾ メチニコフもトゥレティーニも原語や歴史史料の真なる理解を重要視し、言語障壁が多かったといえどもオリエント諸文化の史料を原語で解釈する理想に向かって努めた。十九世紀に流行していた目的論に基づいた世界史観を抱いていたとはいえず、一八七〇年代という時代背景を考慮すると、彼らはきわめて進歩的なアプローチを望んで研究していたといえよう。

日本文学を出版したジュネーヴ人

ジュネーヴの周辺で活躍したオリエント研究者たちを結びつけた一つの施設は、トゥレティーニが営んだ専門出版社「あつめくさ」であった。トゥレティーニはジュネーヴ市の上層ブルジョワジーの息子であり、その豊富な資金を使い、東洋文学の普及に情熱を捧げた。⁽¹²⁾ トゥレティーニの父親であるウィリアム (Turrettini, William, 1810-1876) はジュネーヴ市の最も高い役職の一つを務めた。トゥレティーニは父に東アジアの諸言語の魅力を理解

してもらうよう、説得を続けたが、日本語や中国語を勉強したいという夢が許されることは難しかった。トゥレティーニはその代わり一八六五年に、古典ギリシャ哲学を学ぶためにローマへ留学することになった。

プロテスタントの信仰心が深い父にとって不満であったのは、トゥレティーニがローマで中国語を研究していたイエズス会士ジョセフ・グリエル (Guriel, Joseph, +1880) に出会ったことである。⁽¹³⁾ 中国語の基礎知識を築いた後で、当時最も有名な中国学者の一人、スタニスラ・ジュリアン (Julien, Stanislas, 1797-1873) の下で勉強を続けるために、トゥレティーニは一八六六年にパリへ引っ越した。⁽¹⁴⁾ パリでは日本語、満州語やモンゴル語の授業も受けることができ、オリエント文学の専門出版社を創立したいという計画を立てるに至った。ナボリの中国宣教学校の恩師への手紙では、トゥレティーニは一八六七年、ジュリアン氏が北京から注文した四万二千本の本製漢字活字が届いたと報告している。この手紙で彼は「これからは銅の鋳型をつくって、活字を好きなだけ複製する予定だ」とも述べている。⁽¹⁵⁾

ジュリアンはこの膨大な数の活字を、『新中国語統語論』(1869/1870)を印刷するために必要としたのである。⁽¹⁶⁾ 文字のスタイルは一致するので、トゥレティーニは出版社「あつめくさ」を創立するために、恩師から活字セットを譲り受けたことが推測される。漢字を印刷することは西洋の研究者にとっては大きな挑戦であり、以前は辞書ですらローマ字しか使えなかった。一つの例外としては一八三〇年の『メドハスト和英辞典』⁽¹⁷⁾が挙げられるのだが、三四四頁の石版画から成るこの稀な本の印刷は非常に大きな費用を伴い、困難だったはずである。ウィーンの言語学者アウグスト・プフィツマイアー (Pfizmaier, August, 1808-1887) も一八五一年に漢字入りの日本語辞書を刊行するという野心的なプロジェクトに取り組んだ。後述するように、プフィツマイアーは一八四七年に仮名の活字を作り、日本の絵本を複写した。しかし辞書となると非常に多くの漢字の活字が必要になったため、活字の製造は望めなかった。石版画による複写の費用はあまりにも高くつき、プロジェクトは途中で中止された。この事実を踏まえ

るならば、トゥレティーニの漢字印刷機の有する意義は明白である。

一八七一年に、トゥレティーニは『平家物語』をフランス語訳として初めて出版したが、この時はまだ漢字の活字を使っていない。言語学者として最も興味を持っていたのは、日本語を正確に翻訳する方法だったと考えられるが、絵の魅力も見逃すことはなかった。日本の絵巻物や木版画は当時の読者にとってはあまり見慣れたものではなかったにもかかわらず、トゥレティーニは木版画の複写もそのまま書物に掲載したのである。アンベールの『図解日本』に掲載されたイラストの大半はこれとは異なり、日本の風景をヨーロッパの視覚芸術に移したものである。たとえば、日本の伝統的な絵に頻繁に現れる鳥瞰図などと違って、アンベールが載せた絵は必ず中央遠近法を使い、日陰で立体感を創る。人々の身体は勿論、自然主義的な描き方しか選択技に入らなかった。当時はこのように「翻訳」すれば、ある絵は真実を表すといった信憑性が高まったのである。

一八七二年には、チン・ター・ニー（陳大年、Tschin, T'ai-Ni 1842?）という中国出身の印刷師を助手として雇った。チンは中国の田舎から上海に出てきてイギリス人の使用人となった際に、外国語に才能がある点が際立っていた。不幸なことに、仕事を探す際に騙されて奴隷としてキューバのプランテーションに売られるけれども、そのプランテーションの経営主によってフランスに連れられていかれ、当地の法律に基づき自由になった。清国の大使館を介して、チンはやがてジュネーヴの出版社「あつめぐさ」に就職した。どこまでトゥレティーニの研究に影響を及ぼしたかは推定しがたいが、日本語には堪能でなかったものの、漢字を間違えずに印刷できるチンの特別な才能はきわめて役立ったと考えられる。

トゥレティーニの刊行物は珍本になったのだが、筆者が入手できた最も興味深い著作は一八七五年刊行の『浮世形六枚屏風』(図1・3・1)のフランス語訳である。江戸の人気作家である柳亭種彦の原作は文政四年(一八二一年)に刊行され、ウィーンのプフィツマイアー氏のドイツ語訳(一八四七年)のお陰でヨーロッパのオリエント研究者

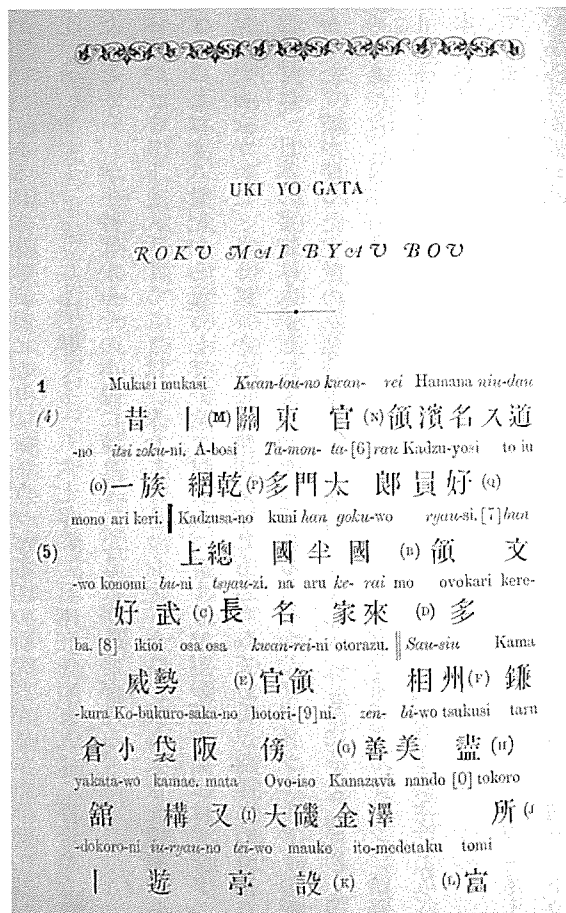


図1-3-1 『浮世形六枚屏風』

『浮世形六枚屏風』のフランス語訳(1875)の第1ページ。仮名の活字がなかったため、トゥレティーニはローマ字の原作に漢字だけを加えた。

(出典) Turretini, François, *Komats et Sakitsi ou: la rencontre de deux nobles cœurs dans une pauvre existence. Nouvelles scènes de ce Monde périssable, exposées sur six feuilles de paravent. Par Riutei Tanefiko*, Genève, Paris, London 1875, p. 2.

の間でも有名になった。②③なぜなら、プフィツマイアーは翻訳のみならず、種彦の合巻の複写本も付録としたのである。仮名の活字を使って印刷した。この傑作は驚くほど本物に近似している。④⑤しかしながら、日本の大衆文学は当時ヨーロッパの評論者の期待していたこととは異なっていたためか、種彦の表現方法は受け入れがたいものとの批評を受けた。ヨーロッパにまで届いた日本文学作品があまりにも珍しかったことから、プフィツマイアーにもこれらの批判をより広い観点から受けとめる余地はなかったであろう。それにもかかわらず、『浮世形六枚屏風』は唯一の、

複数の図書館にある日本語の資料になり、ヨーロッパ各国の研究者が日本語学習に当たって、その文章に触れ合っただけでしょう。トゥレティーニも、早くも一八六七年に、日本在住の友人に『浮世型六枚屏風』の原本を探すように頼んだことから、学生時代からその小説に憧れていたことがうかがえる。⁽²²⁾

日本語のテキストを入手することは、果たしてトゥレティーニの最も大きな挑戦であった。中国趣味の芸術品を収集することは十八世紀から流行していたとは言え、ヨーロッパの図書館にはアジアの言語で書かれた文書は稀にしか見当たらなかった。さらに、かつて「鎖国期」とも言われている、西洋との直接な接触が限られていた江戸時代においては、日本の書物は入手しにくかったのである。しかしプフィツマイアーの例からもわかる通り不可能でもなかった。彼が使った文献の一部はドイツの医者シーボルト (von Siebold, Philipp Franz, 1796-1866) が持ち込んだものであった。日本古典文学や国学思想の代表作の他に、蘭学者によるオランダ語辞典や漢語辞典も一八三五年にオーストリア宮廷図書館に購入された。⁽²³⁾ ヨーロッパの日本研究専門書がまだ乏しかったなかで、プフィツマイアーは日本におけるヨーロッパ研究を逆さまに用いて翻訳したのである。

さて、東アジアへ旅行する機会が一生なかったトゥレティーニはどのようにジュネーヴで日本の珍本を入手し得たのであろうか。一八六六年から一八七〇年の間に書かれた手紙から窺える通り、トゥレティーニはヨーロッパ諸国在住の中国人と連絡をとっており、彼らの母語に関わる助言を仰いでいた。⁽²⁴⁾ 書物の購入についても中国出身の友人達の仲介を必要とした。ただ、一八七〇年前後に連絡をしていた日本人の痕跡は、トゥレティーニ家の史料ではみつからない。ボレル (Borel) という日本在住の知り合いは、数回に渡りトゥレティーニに頼まれた書物を郵送し、その際に売り上げの半分にのぼる利益を得ていた。トゥレティーニが一八六八年に注文した一〇〇冊の価格は総額で一〇〇フランという巨額な金額にのぼった。⁽²⁵⁾

一八七〇年代までの間に日本研究は大きく発展し、日本学研究のコミュニティはヨーロッパで著しく拡大した。⁽²⁶⁾

これは、日本在住者との文通や物資の通商が容易になり、また開港によって旅行が可能になったためのみならず、通商の発展の影響では日本についての情報需要が著しく伸びたためでもある。しかしながら、翻訳にあたっては十分な辞書などに難儀したことから、一六〇四年に刊行されたイエズス会の日本語辞書に頼らざるを得なかったとトゥレティーニは述べている。⁽²⁷⁾ トゥレティーニが蘭学者の刊行物を手に入れたかどうかは不明であるが、一八六七年の手紙では「日本の言葉に漢字が伴った、なるべく大きな和欧辞書」を日本在住の書籍商に頼んだ。その際は五〇〇フランにのぼる金額に相当する本を注文し、『平家物語』や『浮世形六枚屏風』などといった名作以外の詳細な選訳は、ある「博学な日本人」に譲った。

トゥレティーニの跡を追って

ヨーロッパ諸国のオリエント研究者はトゥレティーニの著作を評価しただけではなく、協働して研究書物を刊行した。⁽²⁸⁾ 漢字が印刷できるというトゥレティーニの稀な才能はオリエント学の普及に大きく貢献した。早くも一八七八年の第三回パリ万国博覧会にあたり、トゥレティーニは栄誉メダルを与えられた。⁽²⁹⁾ しかし、「ジュネーヴ地理学研究会」で主導的な役割を果たしていたこと以外、トゥレティーニはどの研究機関にも属せず研究をおこなったのである。東アジア研究の機関が未だにない国では、このような研究はエリートに興味には他ならなかった。トゥレティーニも、莫大な遺産のお陰で研究員として雇われる必要がなくなり、独立して出版社を営むことができた。メチニコフの『日本帝国』の際にはむしろ後援者となったほどである。⁽³⁰⁾ ただ、ジュネーヴの市民からは「中国人のトゥレティーニ」とからかれ、正当に評価されたとは言えない。⁽³¹⁾

トゥレティーニの手稿や手紙は未だわずかしが発見されておらず、彼の生涯に関わる情報は比較的乏しい。一八九四年に第一〇回「国際オリエント研究学会」がジュネーヴで開催されると、トゥレティーニの東洋美術収集

品が展示された。⁽³⁵⁾ その収集品の大半はアンベールが日本滞在中に集めた三六六八点の美術作品から成っていたという。アンベールのコレクションを引き継いでから、⁽³⁵⁾ トウレティーニは一生東アジアの印刷物や芸術品を収集しつづけたが、亡くなる時まで東アジアの地を踏むことは一度もなかった。残念なことに、このコレクションはトウレティーニの死後に三回に及ぶオークションで分割されて販売されたために、その痕跡は一切見つからない。⁽³⁶⁾ アンベールのコレクションもオークションの際に分割されたのである。その一部は一九三二年にマルセイユの古書店で再発見され、ヌシャテルの民族学博物館に所蔵されるようになった。⁽³⁶⁾

(ヨナス・ルエグ)